



令和元年度 学校だより

緑 柏

長崎県立佐世保南高等学校

No. 169 令和元年8月30日発行

発行責任者 下 釜 祐 保

校長室の窓から

百聞は一見に如かず

校 長 下 釜 祐 保



今月初日、中学生らに集まってもらい、本校のオープン・スクールを実施した。

600名を超える参加者で喜びに堪えない。本年度から始動した新分掌『広報部』と、高2の有志生徒らによる運営は圧巻であった。

オープンニングの挨拶で「どの高校にも一長一短あるでしょう。多くの学校のオープン・スクールに参加して、自分の目と肌で一長一短を見極め、“短”のない学校選びでなく、自分の“長”に合う学校選びをして欲しい」と話した。南高の良さはここで言うまでもないが、参加した中学生らの心に響くものがあり、ワクワク感とともに本校への進学希望度を高めてもらえたら、有志たちも嬉しいであろう。

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』で、竜馬と藤兵衛の次のような会話のシーンがある。

「それなら旦那は、この眺望をみて、なにをお思いになりました」

「日本一の男になりたいと思った」

「旦那」と藤兵衛はむくれて、「それは気のせいでございますよ」

「あたりまえだ。正気で思うものか。坂をおりればすっかり忘れてるにちがいないが、しかし一瞬でもこの絶景をみてころのうちがわくわくする人間と、そうでない人間はちがう」

19歳の坂本龍馬が、はじめて富士を見たときのやりとりである。

ひと目見て心が動く。はじめて見てワクワク感を感じる。まさしく「百聞は一見に如かず」の格言のとおり、人生はこの一瞬を境に大きな可能性へと拓けていく。

この“夏”を自分の人生に活かした本校生も多かった。海外体験を求めて国外へ出かけた者、リーダー・セミナーにチャレンジした者、部活動などで九州大会・全国大会へ出場した者、日本各地の大学で行われたオープン・キャンパスに参加した者、そして、学習合宿や夏季補習等でとことん質問して核心に迫った者も…。それぞれが竜馬と同じワクワクする心を感じたことを期待したい。

俗説によれば、「百聞は一見に如かず」には“続き”があるらしい。「百見は一考に如かず」、そしてさらに「百考は一行に如かず」…。

やはり、自己教育は「受け身より仕掛け」が鉄則である。

明日から長い2学期が始まる。仕掛ける機会、ワクワクする機会を多く作れそうだ。